

# « C'est alors qu'apparut le renard » :

## 場面の転換を表す分裂文

渡邊 修吾

(獨協大学大学院)

本発表では、分裂文 *c'est alors que P* を主な考察の対象とする。

強調構文とも呼ばれる分裂文は、一般に、焦点化構文とされ、*c'est X qui/que P* という型において、Xは新情報かつ焦点であり、Pは前提であると説明される(Riegel et al)。

しかし、この説明は次のような文と矛盾する：

(1) *C'est alors qu'apparut le renard* (Saint-Exupéry, *Le petit prince*, p. 70)

この物語(*Le petit prince*)において、キツネ *le renard* が登場するのはここが初めてであり、*le renard-apparaître* という命題は（少なくとも読者にとっては）前提ではない。また、*alors* は、前文脈を受けており、その意味において、新情報ではない。すなわち、(1)の例は *Quand apparut le renard?* のような問いが想定される分裂文とは明らかにその用法が異なる。本研究では、(1)の例が章の始まりに使われている点に注目し、このような分裂文を「場面の転換を表す分裂文」と呼ぶこととする。

横井(1998)は、*c'est* 以下は先行文脈に現れている要素を受け、*qui/que* 以下で新情報を加えている分裂文を、典型的な「対比の分裂文」と区別し「その他の分裂文」と呼び、次の用に図示する：

(2a) 対比の分裂文：*c'est + rhème qu- + thème*

(2b) その他の分裂文：*c'est + thème qu- + rhème*

この分類に従えば、(1)の文は「その他の分裂文」に含まれることとなり、*alors*がテーマを、*le renard-apparaître* という命題がレーマをなすこととなる。しかし、この分析は次の2点において問題があると考えられる：

i) 一般に文頭に置かれた要素、文頭遊離された要素はテーマをなすとされる。*alors* は文頭遊離が容易な副詞であり、分裂文に頼らずとも次のように言えば、テーマとして十分に機能する：

(1') *Alors apparut le renard.*

このように *alors* が文頭に置かれた *Alors P* と、分裂文 *c'est alors que P* に、差異はないのであろうか。

ii) *c'est X qui/que P* という一つの形式が、テーマ/レーマに関して全く逆の情報構造を許容するとは考えがたい。仮にそれが可能であるとしても、同じ形式を用いるからには、両者にはなんらかの共通性があると考えられる。その共通性とは何か。

本研究では、特にi)の問題に重点を置き、次のような比較・考察を行なう：

分裂文 *c'est alors que P* を、文頭に *Alors* が置かれた *Alors P* と比較することで、特に共起する動詞の傾向差から、分裂文 *c'est alors que P* の特徴を示し、それがなぜ「場面の転換」につながるのかを考察する。

ついで、*X* の位置に前方照応的な要素が置かれた他の分裂文とも比較することで、*c'est alors que P* に限定的なものではなく、前方照応的な要素を *X* の位置に含む分裂文全体に共通の機能について考察する。